

海の道むなかた館長 西谷 正

(1) 邪馬台国への道 一見えてきた倭人伝の世界— (2) 古代の“謎” 邪馬台国への道



I. はじめに

(1) 平成 7 年(1995) 1 月 29 日 福岡市西市民センター 古代史シンポジウム

(2) 平成 13 年(2001) 10 月 2 日 IMS ホール 九州国立博物館着工記念シンポジウム

II. ビデオ放映

(1) 邪馬台国への道 一見えてきた倭人伝の世界—

KBC九州朝日放送 平成 7 年(1995) 2 月 12 日放送から

(2) 古代の“謎” 邪馬台国への道

TNCテレビ西日本 平成 13 年(2001) 10 月 20 日放送から

III. 質疑応答

IV. おわりに

【お知らせ】

次回の館長講座は 10 月 13 日(日)13:30~(2 時間程度) 講義室にて開催いたします。



内行花文鏡
(前原市平原遺跡出土・文化庁所蔵)

2001年10月6日(土) 午後2時～午後5時半

IMSAホール(福岡市天神)

主 催 : TNCテレビ西日本 西日本新聞社

特別協賛 :  太宰府天満宮

■プログラム

14:00 開会あいさつ

基調講演 『アジアの突破口としての九州』

樋口 隆康氏 (奈良県立橿原考古学研究所所長)

14:30 休憩 (10分間)

14:40 パネルディスカッション『古代の“謎”邪馬台国への道』

| | | |
|--------|------------------|--------|
| 【パネラー】 | ・奈良県立橿原考古学研究所所長 | 樋口 隆康氏 |
| | ・宮崎公立大学人文学部教授 | 奥野 正男氏 |
| | ・東亜大学総合人間・文化学部教授 | 黄 晓芬氏 |
| | ・佐賀女子短期大学文学科教授 | 高島 忠平氏 |
| | ・九州歴史資料館副館長 | 柳田 康雄氏 |

(順不同)

【コーディネーター】 九州大学大学院人文科学研究院教授 西谷 正氏

16:30 九州国立博物館紹介 (休憩10分)

16:40 アトラクション

| | |
|-------------------------------------|------------|
| ・獅子舞… ^{だいぶ} 大分八幡宮 (福岡県筑穂町) | ・大分の獅子舞保存会 |
| ・ガムラン… 筑紫女学園大学ガムラン同好会 | |

17:30 終了 (予定)

■パネラー



樋口 隆康氏（奈良県立橿原考古学研究所所長）

1919年福岡県生まれ。京都帝国大学大学院修了。

シルクロード交流史研究の第一人者。現在、泉屋博古館館長、京都大学名誉教授など。主な著書に『大陸からみた古代日本』『三角縁神獣鏡 新鑑』など。



奥野 正男氏（宮崎公立大学人文学部教授）

1931年北海道生まれ。美唄東高校卒業。

古代の鉄器や銅鏡の研究が専門で、邪馬台国に関する著書や論文も数多く発表。主な著書に『邪馬台国はここだ』『鉄の古代史』など。



黄 曉芬氏（東亞大学総合人間・文化学部教授）

1957年中国西安市生まれ。西北大学歴史学部卒業。

漢墓と唐代華清宮遺跡などの発掘調査に従事。古代の墓の成立や他界觀の専門家。主な著書に『中国古代葬制の伝統と変革』『副葬を通してみた社会の変化－中国漢代－』など。



高島 忠平氏（佐賀女子短期大学文学科教授）

1939年福岡県生まれ。熊本大学法文学部卒業。

吉野ヶ里遺跡の発掘調査や保存整備の総指揮を執る。佐賀県立名護屋城博物館館長を経て現職。主な著書に『吉野ヶ里と古代遺跡』『縄文の宇宙・弥生の世界』など。



柳田 康雄氏（九州歴史資料館副館長）

1943年福岡市生まれ。國學院大學卒業。

伊都国の考古学的研究に力を入れる。福岡県教育庁文化財保護課長などを経て現職。主な著書に『伊都国を掘る』『青銅器の創作と終焉』など。

■コーディネーター



西谷 正氏（九州大学大学院人文科学研究院教授）

1938年大阪府生まれ。京都大学大学院修了。

『考古学による日本歴史』全15巻を編集、刊行。現在は『東アジア考古学辞典』などを編集中。主な著書に『邪馬台国時代の国々』『三角縁神獣鏡と邪馬台国』など。

■ 邪馬台国論争 九州説 VS 畿内説

邪馬台国論争はなぜ始まった？

大正13年(1924)新感覚派といわれる小説家横光利一が「日輪」を発表した時、一般読者の多くは、ヒロイン卑弥呼がいかなる存在かを知らなかった。現在では、彼女の活躍した時代や彼女の性格、服装や住居まで多くの人が語り合い、議論しあう、いわば日本歴史上の最も関心が寄せられる人物のひとりになっている。

そして戦後、松本清張の短編小説「陸行水行」が発表された時に、「陸行」や「水行」という特異な語彙が“魏志倭人伝”の中の用語であると思いついた読者は多かった。

魏志倭人伝、正式には三国志魏書東夷伝倭人条、筆者は中国西晋の史家・陳寿(232-297)で、古代の日本のありように関心を抱く人々の間に、いつのまにか心に懸かる文献となっていた。

長崎県島原市の文学学者宮崎康平が同人誌「九州文学」に「まぼろしの邪馬台国」を発表し、引き続き一冊の本にまとめて出版したのは昭和42年(1967)、このベストセラーの出現で、邪馬台国、卑弥呼は全ての人の“謎”になり、決定的に国民的関心事になった。

文学上の出来事のように述べたが、歴史書として倭人伝は江戸時代中期から、国史を研究する学者の議論とはなっていた。新井白石が「古史通或問」(正徳6・1718年)で、邪馬台国は大和と、初の“学説”を樹てた。その約60年後の本居宣長は先覚者白石の見解に異を唱えて、“九州説”を唱え、邪馬台国論争は始まった。

後代の畿内説と九州説は、江戸時代の二大碩学によって基礎がおかれたといえる。

歴史学の九州説 VS 考古学の畿内説

明治期の日本民族起源論に絡む邪馬台国研究に続いて、本格的論争は白鳥庫吉、内藤虎次郎(湖南)両氏に始まる。京都大学教授の内藤は“魏志”の論述の方角に誤りがあり、東を南と記していると考え、畿内説を導き出し、一方、東京大学の白鳥は方位里程を追求し、また地名官名をも重視しつつ、九州説をとった。

江戸期の畿内・九州両説は、近代東西の代表的歴史家によって受け継がれたわけである。

戦後、皇国史観の呪縛がとけて、方位・里程、民俗学、歴史学そして新たな発掘の成果をひっさげた考古学を加えて、一層の進展と精密化をみせてきた。考古学的な成果としてあげるべきは、青銅器遺物、特に鏡だが、同範鏡の豊富な出土例が大きい。

そして、江戸期に九州・志賀島から出土した、後漢皇帝から奴国王に送られたとされる金印の先例から、親魏倭王の印綬がどこから出土するのか。中国をめぐるいわゆる金印国家群の探求と相まって今後の成果が待たれている。

かつての京都学派の畿内説、東京学派の九州説にかわって、現在では大まかに言って、歴史学の九州説、考古学の畿内説と陣営が分けられている感があるようだ。

頭初に揚げた文学作品のみならず、“邪馬台国”“卑弥呼”に関する著書は常に書店の棚を賑わし、一層国民的な関心事、国民的な“謎”として私たちの前に立ちはだかっているのである。

西谷 さきほど言われたように、誇張して表現する時なんかに、百とか千を使うわけですが、文字通り算数的に百枚ではなくて、たくさんの鏡ということでしょう。これを考える時、重要なポイントになるのは山城南部の椿井大塚山古墳の銅鏡だと思います。ここから銅鏡が三十六枚以上出ていますが、そのうちの三十二枚ほどがいわゆる三角縁神獣鏡で、それ以外に後漢の鏡が二、三枚です。ですから一挙に大量の鏡が必要だというところで、卑弥呼に与えるために特鑄したといふ説を前から支持しているわけです。しかし、そのうち大多数は特別につくった三角縁神獣鏡ですが、それ以外に少数の、その当時の魏の鏡、その一つが大田南5号墳（京都府弥栄町・峰山町）から出土した青龍三年（二三五年）銘の方格規矩四神鏡だと思うのですが、そういうものもあれば、都にあつた古い後漢時代の鏡とかも、一緒にもたらされたのではないかと思います。しかし、およそ九九%までは三角縁神獣鏡だと思っています。

佐原 畿内説にとつて一番有力な根拠は、三角縁神獣鏡を魏からもらつた鏡と考えるということがあります。その中には景初三年（二三九年）、つまり卑弥呼のお使いが行つた年や、帰つてきた正始元年（二四〇年）という年も書いてある。それが近畿地方を中心として分布しているということが一番大きな根拠です。これについては、魏の鏡ではない、南中国の吳の技術者が日本に来てつくつたという説もありますが、その説をとる中国の王仲殊さんは、しかしそれは邪馬台国のために造つたものであるとして、日本で造つたことを認めながら、畿内説を認めている。

金関 銅鏡百枚というものは数が多かつただけとも考えられますが、これは詔勅の内容だから、

「二倍だな」と思つていた。ところが福永先生に笑われました。「これは長寿だと書いてあるだけである」と。そう言われれば、「千差万別」「聞け、万国の労働者」、それに「百獸の王」「百人力」「百万本のバラ」「百戦錬磨」。これ、みんな決して百じやないですね。今まで私は「魏志倭人伝」と考古学的事実の食い違いと思っていたのですが、そういうことを習いました。

卑弥呼と鏡

時間がなくなりましたね。「倭國」は乱れちゃいました。ここで神がかりの靈力の卑弥呼さんが出てきました。卑弥呼の宮殿のところも、福永先生の解釈は私たちの知つてている読みとは違つてしましました。今までの訳では、卑弥呼が住んだ居処は宮室、樓觀……という具合に分かれている、と読む。しかし、福永先生は違うという。「居処は私的な住まいで、宮室が公的な宮殿である」。つまり、居処というのは、この卑弥呼さんの邸宅の一部分を指しているということになりました。

金関 居処については『孔子家語』に「居處、飲食、言語は衍爾たり」と書かれていました。住まい、話し方、ものの食べ方はゆつたりとしなければいけないという戒めがある。そういうところから、居処は居る所と読まずに、プライベートなハウス、住まいである。

佐原 いろいろまだあるのですけれど、飛ばしましよう。近畿説の唯一かつ最大の頼りは、「銅鏡百枚」。西谷さん、銅鏡百枚から見ると、どう思うか、おっしゃっていただけませんか。

西谷 馬韓の場合は、一家がすべてその中で一緒に暮らし、長幼男女の区別がないと書かれています。

佐原 比べると面白いですね。朝鮮半島の場合は恐らく堅穴住居に住んでいて男女、大人も子供も一緒に住んでいる。僕はむしろ平地に建てた家に住み、父母と子供は別に寝ると書き分けているようです。

共食で手づかみ

佐原 次に「飲食には高杯を用い、手づかみで食べる」というところを私が解説します。複数で食事する時に、ご飯茶わんでもお箸はしでも湯飲み茶わんでもめいめいが持つ。めいめいの器はいつから始まつたかというと、中国では漢代から。ヨーロッパではローマでは持っていたのだが、中世には持たないで、十七世紀ぐらいから、皆がめいめいの器を持ち始める。あの『随想録』を書いたモンテニュが南ドイツへ行つてお酒を飲むのに、「めいめいが器を持つてゐる」と書いている。その当時、フランスではめいめいが器を持たないで回し飲みをしていたということです。ついでながらモンテニュは「私は早食いだからよく舌をかんだり指をかむ」とも書いています。手づかみで食べていたからです。

めいめいが器を持つことがいつ始まつたか、どうやつたら分かるか。家が火事になる。跡を整理しないまま捨てた家を発掘すると、ものを貯える器や煮炊きする器があるほかに、四つか五つ、

ですね。足跡が出てきて、親指が出っぱっている。私はこれを「外反」していると書いたんです
が、医学的には「内反」なんですね。水田の足跡は全国各地に弥生、古墳時代のものが残っています。
親指はみな内反している。これは、田んぼに入った時だけ裸足になつたわけではなくて、いつも裸足で大地をたくましく踏まえていたからこそです。

今度は、西谷さん。家屋ですが、韓国では竪穴（縦穴）住居に住んでいるようなことが書いて
あつたのではないかな。

西谷 馬韓のところでは草屋根です。土壁を周囲に巡らして屋根の上から中に入り、形は塚の
ようであると見えます。ですから竪穴式住居でしょうね。土壁を巡らしているとあるから、竪穴
式住居を掘つた土を外に積んだのでしょうか。屋根の上から入るとあるから、はしごを使った可能性
があります。

佐原 屋根から入る竪穴住居は北の民俗例にあちこちにあるので、朝鮮半島南部の家の記述は
竪穴住居が書いてあるとみてよい。「魏志倭人伝」の「倭」の場合には、「家屋を建てる」と地上
にちゃんと建つてある建物を書いている。

次。「父母兄弟はそれぞれいるところが違う」という点について、金関さん。

金関 この読み方が問題です。「父母」「兄弟」の二つに切るか、四つに切るか。読み方がいろ
いろありますが、福永先生は「父母」を一つ、「兄弟」を一つ。「きょうだい」の中には姉妹も入
る。ですから一つの家の中でごろ寝をする場所が父母と子供で分かれている、とされています。

らいの土器が副葬されていました。また雀居遺跡で小型の仿製鏡ぼうせいきょうという中国鏡を模した鏡が出たと午前中に紹介されました。良洞里で同じような鏡が出土しました。日本列島と大変関係の深い文物が中国の文物と共に出土する遺跡がたくさんあります。

佐原 狗邪韓國もだいぶ分かつてきました。いま西谷さんが言われた所よりすぐ東側にある大成洞の、四世紀ほどの墳墓群がある丘にも周囲に濠があり、申敬澈さん（韓国・慶星大副教授）は「これこそ狗邪韓國の中心だ」と言っています。すぐ南にある鳳凰台という丘にも環濠が出ている。いまや狗邪韓國の中心部分の調査が進行しています。

海を渡り対馬に行き、壱岐に行きましょう。対馬と壱岐の「魏志倭人伝」の解説が非常に適切であることはよく知られています。対馬は山だらけ。それに比べると壱岐は平らである。きょう長崎県壱岐教育事務所長の木村晃一さんが見えているが、面白いことを教わりました。現在、壱岐と対馬で田畠がどれくらいあるか。壱岐は全体の三二%が耕地で、対馬は現在でも一%しか田畠がない。違いが今でも大きいことは面白い。先ほど副島さんが船に乗つて南や北と交易をして暮らしていた様子を説明し、灰色の土器も紹介しましたね。ああいう土器は全部、樂浪系と呼んでいる。朝鮮半島から渡つてきている土器の中には、塩屋さんに言われてなるほどと思つたのですが、当然、帶方郡からの土器があるはずである、と意識しなければならない。

いよいよ、風俗ですが、入れ墨の話が出てくる。中山さん、『古事記』に出てくる入れ墨との比較をお願いできますか。

授) の脚注 (テキストの現代語訳につく) では「今のソウル付近」とあるが、これは一説です。そこより西北に百五十キロほど行つたところ、現在は朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の黄海北道鳳山郡に当たる場所に、土城で囲まれた一角があり、私はそこが帶方郡の所在地だと考えます。

倭国への出発点ということで、狗邪韓國も非常に重要です。ここは倭人伝の前の韓伝の弁辰條に狗邪國と出てくるところと同じ地域です。午前中に七田さんが報告の中で当時のクニは神埼郡などの郡ぐらいの規模と言わされました。朝鮮半島についても同じようなことが言えます。現在このあたりをいう金海郡が、だいたいもとの狗邪韓國あるいは弁辰狗邪國の地域ではなかつたかと思います。ここ数年、重要な調査が進んでいます。かつて、良洞里という墳墓群の遺跡の中からうは末盧國の桜馬場遺跡（佐賀県唐津市）で出土した後漢鏡と同じ形式の後漢鏡が出土しています。おそらく良洞里は狗邪韓國の王墓を含んだ墓域であったと思います。ただ、残念ながら狗邪韓國では拠点集落はまだ見つかっていない。しかし、良洞里から東へ指呼の間にあるハソンという貝塚遺跡には土壘があるので、そこが拠点集落ではないかと考えられます。そのすぐ西側に王墓域を形成したということですね。

もう一つ重要なことは、最近、金海貝塚の丘の上で環濠が見つかりました。この上に立つと、金海平野がずっと見渡せます。そういう意味では日本の高地性集落に相当するのではないかと言えます。日常的な拠点集落とセットの関係で高地性集落があるということが分かってきました。良洞里もそうですが、もう一つ池内洞では、小型のかめ棺に対馬か北部九州の紀元後一世紀く

いきますので、割り付け用のコンパス、定規はあつたと思います。

また、翳というのは偉い人、貴人のお顔を直接見えないように、お付きの人が両側から二枚持つて隠すわけです。高松塚古墳（奈良県明日香村）の壁画に、翳を持つている女官の絵があるが、丸いうちわの形をした差しかける威儀具です。今回出土した紀元一世紀初めごろの円形の水銀朱を塗つたものが翳かどうかは今後の検討になります。

北九州市の東さんから、弓や釣り糸には何の糸を使つたのでしょうかと質問です。福岡市西区にある吉武樋渡遺跡のかめ棺から出た把頭飾はとうかざりに、柄にくくりつけるときに使つた細い麻紐が付いています。吉武大石遺跡の銅劍には、軸つまり茎ながさに絹の細い糸を巻き付け、柄に差し込んでまたその上から巻いて漆を塗っています。絹糸もあります。植物の纖維が使われている可能性もあります。実際に弓の弦や釣り糸にどれが使われていたかは分かりません。

帶方郡・狗邪韓國

佐原 たくさん質問ありがとうございました。それでは、テキストを使いながら読み始めたいと思います。ほんと風俗でいくのですが、最初に帶方郡たいほうぐんと狗邪韓國くわかんこくについて、西谷さん、お話し下さい。

西谷 冒頭に「倭人は帶方の東南の大海上にあり」と出てくるように、帶方郡は邪馬台国にとつて重要な地域であったことが分かります。問題は場所です。平野邦雄先生（東京女子大名誉教

倭奴リワド國論

金関 西谷先生からとつても面白いお話しを伺いました。画然とした都市計画があるということですね。おそらく吉野ヶ里も調査が進めば、居住地区、商業地区などが分かつてくるはずで、楽しみに見守っています。

『後漢書』に倭奴國^{わのなこく}が出てくると言われましたが、光武帝紀の中元二年の条も、「わどこく」と読めないことはない。使者は「わのなこく」と名乗ったのかもしれないが、後漢では「わどこく」と認識したかもしない。金印の「わのなこく」は「わどこく」と読むべきだろう、というのが福永先生の説です。

この説は福永先生が初めてではなく、早稲田大（名誉教授）の水野祐先生も唱えました。『旧唐書』の中に、倭は「わこく」と呼ばれるのを雅でないとして日本と国号を変えた、と書かれている。中国の漢、魏などは、匈奴^{きょよう}に対して倭奴^{わの}であり、匈奴を「きょうのなこく」とは読まないはずである。第一、皇帝が金印を渡すときに、「わのなこく」に与えるはずはなく、「わどこく」と読むべきだ、というのが福永先生の主張です。

佐原 奴国が存在しないのではない。奴国はあるわけです。匈奴はガチャガチャうるさいやつ、倭奴はちびっ子野郎、と対照したということですね。では、金関さん、本来の発表をどうぞ。

いますが、三十以上のクニの配置を考える時に、考古学の発掘を通じて数十ヶ規模の拠点集落があれば、その地域にクニがあつたと考えていいのではないか、とと思います。

日本列島から四千キロ以上離れた西域の例を参考にしながら、同じ時代に、匈奴の左手を断つたために樂浪郡、そして右手を断つために河西回廊に諸郡を設置し、さらにその西の諸国や烏孫とか大月氏とかに、漢の武帝は触手を伸ばし、時には軍隊も派遣したのです。日本列島のことを考える時に、反対側の西域も視野に入れるべきではないか、そうすることでヒントも得られる、と考えています。

もう一つのポイントは、内部の構造です。交河故城では門が三つ分かっています。そのうちの南門を入れると道路で、入つてすぐ東が一般住民の居住区であり、その一角に国を治める官庁と思われるひときわ大きい建物がある。その北は商業区で小さな建物がたくさんあり、おそらくシルクロードを通して入つて来たものも売られていたことでしょう。そして西側には仏教寺院がある。交河故城の数十翁の中に道路が網の目のように走り、ブロック状に区画されていて、その内部の構造が分かるのです。

つまり、その時代の首都はすでに都市的な機能を果たしていたのです。そこで、その内部がどう機能分担されていたのか、という観点から発掘調査を進めてほしいと思っています。

佐原 壮大なお話で、匈奴の話が出ましたので、金関さんに福永光司さんの倭奴國論を紹介していただきます。それから本来の金関さんのお話しをお願いします。

に、車師前国しゃしぜんこくという国がありました。『漢書』の西域伝に「車師前国は交河城に都す」と書かれてあります。続けて、「戸数七百、人口が六千五十人」、さらに「兵が一千八百六十五人」とそこまで書いてくれています。そういう車師前国の都にあたる遺跡が交河故城です。

この交河故城を調べると大変興味深いことがあります。二つポイントがあり、一つはその規模です。南北が一・二キロ、東西三百メートルくらいですが、遺構が濃密に分布しているのは南北一キロくらいです。全体の面積をみると、三十から五十ヘクタールくらいの規模になります。

ここで、七百戸の規模の都が数十ヶ所であることが分かりますね。原の辻遺跡を発掘している副島さんによると、一支国の首都が二十五ヶ所、また吉野ケ里が四十ヶ所といわれています。もちろんクニには大小あります、当時の首都は数十ヶ所の規模が一つの目安になります。私たちはそれを拠点集落と呼んでいますが、数十ヶ所の拠点集落が当時つまり紀元前後から邪馬台国の時代にかけての首都の規模ではなかつたか、と思うのです。

ちなみに朝鮮半島西南部の扶余のそばに松菊里という柵を巡らした大規模な集落が知られています。ここも少なく見積もって三十一ヶ所、大きくて六十ヶ所とみられます。また、大型の建物跡が見つかった滋賀県守山市の伊勢遺跡も二十七ヶ所といわれます。当時、各地にクニがあり、その都である拠点集落は数十ヶ所です。

金印の時代に百余国といわれるが、倭人伝の時代にはどれくらいのクニがあつたのか、実は分かつていません。そのうち三十国が魏と外交関係を持つたとあります。私は二百以上と試算して

西域にヒント

西谷 『漢書』の地理志に「樂浪海中に倭人あり。分かれて百余国をなす」とあります。倭と呼ばれた日本列島内に百余りの国があつたとの記載ですが、『後漢書』によると、その中の一つに倭の奴国があつたと書かれています。中国の正史には、このように東北アジアには樂浪郡と日本列島にたくさんの国々があつたという形で出てきます。

この樂浪郡が朝鮮半島の西北部、現在の平壤^{ピョンヤン}のあたりに設置されたわけは、匈奴^{きょく}にあります。

匈奴が絶えず北から南へ攻めてきます。人間に例えれば、その左手にあたる部分が朝鮮半島から日本列島にかけてになる。つまり匈奴の左手を断つという目的で朝鮮半島西北部に樂浪郡が置かれた、と言われています。

樂浪郡が左手にあたるとすれば、右手にあたるところが、はるか西の方の西域と呼ばれる地域、いわゆるシルクロード上の地域になります。樂浪郡から西へ約三千キロ、現在の中華人民共和国の新疆^{しんきょう}ウイグル自治区付近です。私はこの地域にかねてから関心があり、一九八七年から毎年のよう七年間通つて調査しました。その中で感じたことを一部、報告します。

西域、とくに新疆ウイグル自治区付近には、五十余りの国があつたようです。もとは三十六だつたが、後に分かれて増えて五十余りになつた、と『漢書』にあります。五十余りあつた国の一つが、新疆ウイグル自治区の東南へ百六十キロほどのところにありました。そこトルファンといふ町からさらに西に十キロほど離れたところに、有名な交河故城の遺跡が残っています。当時ここ

実は「魏志倭人伝」は四つの部分から成り立っており、最初の部分は邪馬台国への行程、行方が順番に書いてあります。次が風俗で、その次が魏の皇帝の勅語。そして勅語以後の文章があります。今日の話の中心は一番目の風俗になります。

なお、この「倭人伝」の前にあるのは「韓伝」です。その前には「高句麗伝」などもあるが、人という字がついているのは「倭人伝」だけです。だから「倭人」と書いてあるが、この倭人は人という意味ではなくて、倭を意味する、というのが松本清張さんの説です。確かにおかしいですが、だからといって倭に住んでいる人々を「倭人人」とも言えないので、ここでは倭の人を「倭人」とよびます。ただし、「倭人」という言葉には、地理的な意味が込められているということも頭の中に入れておきたいと思います。

「国」「王」という言葉ですが、魏のところでは「國家」を使っています。ところが「倭国乱」という部分の「国」は、前に出てくる一支國などの「國」と同じ「國」を使つても意味が違う。小さなクニがひとまとまりになつたものを「國」と呼んで使う場合もあるし、小さなクニの時も使う。従つて王の場合も、小さなクニの一番偉い人にも、倭の国王のような大きな意味での王としても使つています。

それではさつそく西谷さんから、朝鮮半島、あるいは中国という観点から「魏志倭人伝」の世界を見ていただきます。

京大人文学研究所長）から、金関さんと私は「魏志倭人伝」の講義を受けています。福永先生によれば、南宋は世が乱れていて亡命政権であり、学術資料も散逸し、研究条件も非常に悪い。そういう時に作った本です。中華民国が敗れて台湾に亡命した時にできた学術書に誤字や脱字が多く、ページが飛んだりしたものがあつたのと一緒なのです。古本屋さんでも北宋の本と南宋の本では史料的価値も値段も全然違う。その南宋の本で「邪馬壹」と書いてあるから「^{いち}壹」である、という議論自身がナンセンスである。これが福永先生の意見です。

言葉を整えるために入れた文字もあります。例えば文字を四つ、六つに揃えることは、唐代ぐらに確立するが、すでにその方向にあり、字数を揃えるために入れた文字もある。だから一字一字辞書を引いても仕方がない場合もあるのです。また、現代の中国語と意味の違う文字もたくさんある。例えば、野菜の「菜」は現代の中国では肉も含めた食べ物一般を指す。「中華菜館」という店もある。ところが「魏志倭人伝」のころは野菜を意味する字でした。

これも福永先生に教わっているのですが、「三国志」の著者は孔子さまの書いたものも『莊子』も『漢書』も司馬遷の『史記』も読んでいる。そういう教養で書いているわけだから、読む者もそのような教養を持つていないと正しく読めない。そう言われると、読める人がどれだけいるか。現代中国にもそうはないはずです。

今日は皆さんにお持ちのテキスト（二三〇頁以下に、平野邦雄「『魏志倭人伝』の訳文と解説」として収録）を使いながら、特に風俗・習慣について取り上げていきたい。

は一部が前三世紀あるいは前一世紀に入るかもしない。そういう含みで使います。

「魏志倭人伝」とは、陳寿ちんじゅという人が書いた『三国志』の一部分です。三世紀後半に書いたといいますから、邪馬台国の時代からそれほど遠くはない。同時代の資料だと言つても言い過ぎでない。ただし陳寿さんは日本へは来ませんでした。伝聞をもとに書いています。そういう意味ではマルコ・ポーロの『東方見聞録』と比べることができます。マルコ・ポーロは中国にいながら『東方見聞録』を書いた。同時代のものでありながら、間接的な伝聞や必ずしも正確でない資料を使つたというところで、内容的にはいろんな問題があり得るわけです。

今日皆さんにお配りした資料には『三国志』南宋紹熙刊本しょきはんと書いてありますね。南宋が始まるのが一一二七年。「魏志倭人伝」が書かれてから千年近くたつての印刷本です。それまでは活字がありませんから、文字を書いた木や竹の板をつづっていた。本来あつたものを写し写ししていくしますから、当然そこで字を間違えて写すこともある。あるいは字を抜かしてしまうこともある。

例えば、「一^い支^き国」は南宋の三国志では実際には「一大国」と書いてあります。これはどう考えても「支」という字を間違えて「大」という字にしてしまった。あるいは卑弥呼の使いが魏に行つたのは「景初二年」と書いてあるが、おそらくこれは「景初三年」の誤りであろうと。書き間違いというものが十分あり得るわけです。

その点で一番問題となるのは、「邪馬台国」とは書いていないことです。「臺」ではなく、実は「邪馬壹國」だという意見があるのも、皆さんご存じと思います。中国思想史の福永光司先生(元

それが今日はかわって私が司会の席におりますので、高島さんから「金関さんは公平無私な方である。だけど今日は危ない」と言われました。私も公平ムシでいきます。だけどムシは信号無視の方のムシかもしません。(笑)

最初に幾つかのことを断つておきたい。今日の午前中の現場報告の発表の中でも、弥生の前期、中期、後期という言葉が出てきました。会場の皆さん方には迷惑かと思いますので、今日は世紀でいこうと思います。弥生時代をI、II、III、IV、V、VI期に分けると、九州ではIIとIIIの時期を中期と呼んでいる。ところが中・四国や近畿地方の研究者はII、IIIとIVの時期を中期と呼んでいる。中期、後期という時に同じ単語を使っていても、食い違いがあります。それと、一番古い水田の時期を縄文(縄紋)、時代晚期末というつかみ方と、金関さんや私のように、弥生時代早期、あるいは先I期だと。つまり、弥生というと覚え方と縄文というと覚え方がある。

そこで、先I期を紀元前四、五世紀という言い方にします。そして板付遺跡(福岡市博多区)で代表される、だれが認めても弥生というI期を、前三、四世紀。次の城ノ越式じょうこしとよぶ土器のII期を前二世紀。須玖式とよぶ土器のIII期を前一世紀。IV期を一世紀。V、VI期を二、三世紀と呼びます。ただし、例えばII期を前一世紀と言つても、実際に

魏志倭人伝とは

佐原 まず、会場の皆さん方に伺つておきたい。邪馬台国は九州にあると思う方、手を挙げて下さい。（圧倒的多数、ハイ）。では、挙げにくいでしようけれども、勇気を持つて畿内説の方、手を挙げて下さい。（ごく少数）。ありがとうございます。なお、畿内という表現は七、八世紀になつて使い始めるのだから弥生・古墳時代に使うべきではない、と森浩一さん（同志社大教授）が言つています。本日は「後に畿内と呼ばれるようになつた地方」を略して、畿内と呼ぶことにします。念のためにパネリストの皆さん、九州説の方は手を挙げて下さい。（高島さん、中山さん、拳手）。畿内説の方、手を挙げて下さい。（金関さん、西谷さん、拳手）。金関さんの手が真横なのはどういうことですか？

金関 昔はかたく畿内説を信じていましたが、吉野ヶ里をはじめ九州での遺跡の発掘を見たり聞いたりする度にぐらついてきました。ひょっとしたら九州かもしれないなあと思っています。

佐原 私はどうかというと、「魏志倭人伝」に書いてあることと考古学的なことがどのように合うか合わないか、の方に関心が大きい。どつちか言えといわれたら、畿内説ではないかなあとう程度です。しかし、それでは戦いにならない。今日は倭国乱れなければいけませんので、金関さんも私も徹底した畿内主義者にならないと話が面白くない。司会は本来中立でなければいけないのですが……。

金関さんとコンビで壇上に登りますと、いつもは金関さんが今の私のいる所にいるわけです。

シンポジウム出席者



佐原 真 (さはら まこと)

国立歴史民俗博物館副館長 1932年、大阪市生まれ。弥生土器、銅鐸などの遺物論を中心に弥生文化の研究に当たる。
著書に『日本人の誕生』『騎馬民族は来なかつた』など。



西谷 正 (にしたに ただし)

九州大学文学部教授 1938年、大阪府生まれ。朝鮮を中心とした中国・日本の交流史、東アジアの古代国家成立過程の研究。
著書、共著に『韓国考古通信』『伽耶と古代東アジア』など。



金関 恕 (かなせき ひろし)

天理大学文学部教授 1927年、京都市生まれ。原始、古代の人々の精神生活や祭祀にかかる考古資料を研究。
著・編書、共著に『稻作の始まり』『弥生文化の研究』全十巻など。



高島忠平 (たかしま ちゅうへい)

佐賀県教育委員会文化財課長 1939年、福岡県飯塚市生まれ。佐賀県内の重要な発掘を手がけ、吉野ヶ里遺跡の発掘を指揮。
著書に『日本城郭史大系・佐賀』、共著に『古代史発掘』など。



中山千夏 (なかやま ちなつ)

作家 1948年、熊本県山鹿市生まれ。女優、歌手、テレビタレント、司会者として活躍。
古事記の研究もする。元参議院議員。
著書に『国会という所』『新・古事記伝』『姫たちの伝説——古事記にひらいた女心』など。

第三部 見えてきた倭人伝の世界

第三部 見えてきた倭人伝の世界

I 発掘現場からの報告

一四三

- 1 志賀島と水中調査——金印出土の謎に挑む 塩屋勝利 ······一四四
- 2 壱岐原の辻遺跡——一支国の中心集落 副島和明 ······一四九
- 3 吉野ヶ里遺跡——或るクニの中心集落の様相 七田忠昭 ······一五二
- 4 福岡市雀居遺跡——奴国の中核点集落 下村 智 ······一五三

II 衣・食・住——倭の風俗を徹底討論

佐原 真／西谷 正／金関 恕／高島忠平／中山千夏

一七一

第三部は九五年一月二十九日、福岡市の西市民センターで開かれた古代史シンポジウム「邪馬台国への道——見えてきた倭人伝の世界」（朝日新聞社、KBC九州朝日放送、福岡市、福岡市教委主催）の記録である。午前中が四人の講師による発掘現場からの報告、午後はパネリスト五人による討論。出版にあたって、現場報告は要約し、討論はパネリストが一部を補足・訂正した。

朝日新聞西部本社編

邪馬台国への道



不知火書房

1995年4月10日